

〔翻訳〕

ナチズムと古代

－研究史論評－

フォルカー・ローゼマン 著

酒枝 徹意 訳*

古典考古学者ゲルハルト・ローデンヴァルト（Gerhart Rodenwaldt、1886－1945）の遺稿の中に、《古代に関するヒトラー》（*Hitler über die Antike*）と云う見出しのタイプライターによる2枚の紙片が認められる。そこには、『我が闘争』から三カ所の周知の文と、1933年党大会の文化会議での彼の講演から一カ所の抜粋が引用されている。＜最も壮麗な故に、最も力強いギリシアの本質と精神の表れ＞としてのパルテノンと＜文化における古典時代＞についての解説の後に、ヒトラーは、古代の民との親縁性を訴えた。即ち、＜ギリシア人とローマ人は、ゲルマン人にとって非常に近いものになる・・・何故ならば、すべての者は、自分の根源を基になる人種に求めなければならず、古代の民の不滅の業績は、彼らの人種的に親縁な後裔に、絶えず繰り返しその魅力的な営みを及ぼしているのである⁽¹⁾＞。

私が、この決して華々しいものではない事例に言及するのは、ローデンヴァルトは、いわゆる＜権力掌握＞の段階での典型的な事例を、言わば、順応し、取り入ろうとする試行作業の一步を、古代学者の実例で証明しているからである。夫々＜フューラー＞とか＜イデオログたち＞の演説から引用されたものは、全く異なった＜運動＞或いは＜体制＞における＜出し物＞、ひょっとすると、『古代と我ら』（*Die Antike und wir*）類の重要な文献の一部なのである。

具体的なケースで、ここに一人の考古学者を見るのであるが、彼は、その専門分野と、基本的に全く＜大学とは縁遠い＞運動との間の繋がり糸口を求めて、

* Tetsui SAKAEDA 本学名誉教授

非常に広い意味で、＜全体主義、ないしはそのドイツ的変種であるナチズムの時代の古代学＞と云う研究領域を創めるのである。

研究史に対する私の論評は、当然ながら第三帝国が終わった直後に始まるのであるが、それには、一連の制限が加えられねばならない。

まず最初に、私は非ナチ化の段階から、全く異質な足跡を取り上げる。次いで、しかし何よりも、60年代の半ばから80年代に至る時代空間における我われのテーマとの関わりに、私は集中する。最後に、問題提起の＜急進化＞によって特徴がはっきり示された90年代における動向の若干の側面を、私は挙げてみる。

以下の解説では、全く完璧な研究史ではなく、部分的で、幾分かは個人的な観察を、私は提示するのであって、そこでは、ベアット・ネフ（Beat Näf）の研究報告との重複は避け難い。

私はこの研究史研究において、取り分け、ドイツ社会史叙述を先導している代表者である近代史家たちに関して燃え上がった議論から、幾つかの点で問題を提示したい。即ち、メディアの強い関心の下、1998年9月のフランクフルト歴史家大会において、専門家たちの世界では元来周知のことであったに違いない境遇をめぐって為された論争が、そのことの時宜に適った契機を提供したのであった。この論争を聴いていた者として、その場合も、意識的に私の個人的な印象に拠っている。ごく最近現れた、ヴィンフリート・シュルツとオットー・ゲルハルト・エクセルによって編集された論集『ナチス期のドイツの歴史家たち』は、補遺的な論稿と並んで、＜加筆された報告講演と、綿密に記された注釈＞を記録している⁽²⁾。加筆されることで、大会発言記録集が、恐らく、いっそう良く捉え得たであろうハラハラするような雰囲気の中での激論と、それらの咄嗟的な言動の多くが失われてしまっている。要するに、大会集成の諸論考は、＜進行している＞論争状況を、多面的に伝えているのである。

1996年のミュンヘン歴史家大会での＜ゴールドハーゲン論争＞と同様に、フランクフルト大会の論議も、歴史学と世間との関係の教訓的な出来事と指摘されるであろう。例えば、＜自発的執行人＞と云う用語から直に＜自発的歴史家＞が生じているように、1996年の論争が、フランクフルト大会のきっかけも紛れもなく与えたのであった。

フランクフルト大会では、古代学者たちや古代史家たちによる発表は、確かに

全くなかったが、歴史学の一部門として、少なくとも古代史専攻は、これらの問いかけによって影響を受けている。最近年の〈史学史の再検討〉を一瞥する際の話題である〈歴史叙述史の災禍〉(K. F. Werner)は、古代史にもまた当てはまるのだろうか、と云う問いがその場合に可能である。

フランクフルト大会の論争者たちの立場は、簡単に概略を述べねばならない。彼らは皆、ナチス独裁制(NS-Diktatur)の〈犠牲者たち〉、それに一連の歴史学分野の犠牲者たちに強烈に注意を促す。私は、そこに繰り返し引き合いに出されているのであるが、ペーター・シェットラーにより、最初1997年に編集されたシュールカンプ新書の『1918年から1945年の権力を正当化する学問としての歴史学』〔*邦訳は、木谷勤他訳『ナチズムと歴史家たち』名古屋大学出版会、2001〕は、この意味で、〈ドイツの強制収容所において殺された、ジークモント・ヘルマン、フリードリヒ・ミュンツァー、エルンスト・ペレルス、ゲオルク・ザツケ、その他、ドイツ人および非ドイツ人の歴史家たち、男性たち、女性たちの追憶〉⁽³⁾に捧げられている。カバー折り返しの内容紹介には、〈ドイツの歴史家ツンフトは、ナチズムの侵略政策と絶滅政策に知的に関わったのであり、結局、その歴史を引き受けねばならない〉と、その主張が記されている。この論議のための様ざまの刺激をゲッツ・アリー(Götz Aly)(とズザンネ・ハイム[Susanne Heim])の『ユダヤ人絶滅の先駆者。アウシュヴィッツとドイツによるヨーロッパ新秩序計画』(*Vordenker der Vernichtung. Auschwitz und die deutschen Pläne für eine neue europäische Ordnung*, 1991)から、アリーの最新作、『権力—精神—狂気、ドイツ思想の連続性』(*Macht-Geist-Wahn, Kontinuitäten deutschen Denkens*, 1997)に至る著書が、もちろん与えたのであった。

著しい数のドイツの歴史家たちが、ナチス体制に関わり、支持したことは、アリーと彼の協働者にとって明らかであった。〈この不幸な関与の規模とその結果には、しかし、様ざまの異論がある。そして、もちろん彼の解釈に対しても〉とシェットラーは記している。彼の判断に従えば、その余地は、〈人間的弱さからの言葉だけの同意の単なる確認〉⁽⁴⁾を超え、〈道義的、学問的な共同責任、言わば共犯〉の立証にまで至るかもしれない。この論議は、僅かな特徴で十分である。

戦争終了直後に始められた、全部でも僅かな研究史には、1945/46年、「スイス

大学新聞」に著された『ヒトラー・ドイツにおける精神科学の状況について』（*Zur Lage der Geisteswissenschaften in Hitler-Deutschland*）と云う論稿が入る。これは、先史時代史家、ヨアヒム・ヴェルナー（Joachim Werner、1909–1994）⁽⁵⁾の筆になる。

シュトラスブルク＜帝国大学＞において1942年から1944年、先史および初期歴史専攻を代表していた著者は、スイスの抑留所から記していた。彼は、なにかんずく、ベルリン大学の古代史家、ヴィルヘルム・ヴェーバー（Wilhelm Weber、1882–1948）の1933年以降の素早い順応過程と、またいわゆる＜教員共同合宿＞における、個人的な、明らかに必ずしも全く否定的ではない様ざまの彼の経験を叙述していた。亡命損失の記述はない。

1946年5月15日、一私は、この書物をもって、全く別個のアプローチに出会ったのであるが—マックス・ヴァインライヒが、ユダヤ科学研究所の委託でなされ、同年に著された彼の『ヒトラーの教授たち、ドイツのユダヤ人に対する犯罪における学問の役割』の仕事⁽⁶⁾を完了したのであった。この＜先駆的研究＞は、＜もしも、これがドイツ語に翻訳されたならば、多くの《非ナチス証明請求者たち》は、リストアップされた彼らの行動や引用された文で、心底苦しめられたであろう・・・＞とシェットラーは記している。⁽⁷⁾

そこでは、取り分け、ヴァルター・フランク（Walter Frank）の＜帝国現代ドイツ史研究所＞（Reichsinstitut für Geschichte des neuen Deutschlands）における古典文献学者ハンス・ボグナー（Hans Bogner、1885–1948）の諸活動や、古代史家フリードリヒ・コルネリウス（Friedrich Cornelius、1893–1976）とヨーゼフ・フォークト（Joseph Vogt、1895–1986）の、アルフレート・ローゼンベルクのいわゆる《大学》（Hohen Schule）の付属機関である＜フランクフルト・ユダヤ人問題調査研究所＞（Frankfurter Institut zur Erforschung der Judenfrage）⁽⁸⁾との関係が把握されていた。このリストは、当然不完全であって、例えば、ユルゲン・マリッツが、＜公式利用のため＞と規定された彼の1943年の論考『ギリシア・ローマ古代におけるユダヤ人』⁽⁹⁾（*Der Jude im griechisch-römischen Altertum*）を新たに注意深く整理した古典文献学者ハンス・オッペルマン（1885–1982）の名前が落ちていた。⁽¹⁰⁾クリストハルト・ホフマンによれば、オッペルマンの論稿には、＜そのあらゆる馬鹿々々しさ

と共に、公認のナチス歴史像が、正に一貫して《古代のユダヤ人問題》に転用されていた⁽¹¹⁾のであった。

ライプチヒ大学出身の教師であったテオ・ヘルレ (Theo Herrle, 1888年生まれ) は、1947年ソ連の占領地域で、簡潔なテーマで『ナチズムと古代学』を公表した。彼は、二つの体制下における彼の批判的文章が裏付けているように、ナチス体制下でもソ連占領地域でも順応しない人物であった。⁽¹²⁾ ビザンティン史家ヨハネス・イルムシャーが、1965年ヘルレの貢献を一その間に、著者は西側に移ったのであるが一、ただ非常に控えめに、総括の始まりと評価したのであった⁽¹³⁾が、その理由もまた、そこに在ったのであろう。

ヘルレには、確かに、ヒムラーの〈父祖の遺産〉と親密に結ばれていた古代史家フランツ・アルトハイム (Franz Altheim, 1898–1976) は出てこないが、彼は、正にそのことによって、ソ連占領地域における彼のキャリアを築き、固め得たのであった。即ち、アルトハイムは、なお未刊行の『古代世界の危機』 (*Krise der Alten Welt*) の第2巻の基本的思考を、1943年、機関誌「研究と進歩」に、並びに1947年、東側領域の機関誌「フォーラム、ドイツの大学での知的生活誌」 (*Forum. Zeitschrift für das geistige Leben an den deutschen Hochschule*) に、文字通り公表することが出来ただけではなく、親衛隊の組織〈父祖の遺産〉の多大な支援をもって公刊された彼の『古代世界の危機』の第1巻、第3巻をソ連占領地域並びに東ドイツ (DDR) で発刊し続けることにも、また成功したのであった。同時に、本の見返し、或いは〈親衛隊全国指導者〉の序文と一緒に〈父祖の遺産〉の飾りのみが削除されねばならなかった。そのことが、ソ連占領地域における過去の総括に対する実際注目に値する証拠であると、ヨハネス・イルムシャーは、さりげなく言及していた。⁽¹⁴⁾

別の研究史跡が、シュヴァルツヴァルトのヒンターツアルテンに向かっていた。1949年9月、この地で戦後最初のドイツ古代学者たちの会合が開催され、〈ドイツ古代学は、今日、何処に立っているのか?〉と云う問いに取り組んだのであった。「新チューリッヒ新聞」の記者ヴァルター・リュエックは、モムゼンとヴィラモヴィッツの伝統への思いに、深い驚きを表明していた。〈特に、古代史研究は、歴史学の全般的なナチス的政治化によって全く弱体化しているようであった。そして、ナチス時代に、喜んで特別な譲歩をする気であった (テュービンゲン大

学のフォークトやマールブルク大学のテューガーのような）学者が、《非ナチ化されたもの》として再び大いに発言をリードしている状況は、将来のために、ただ憂鬱な気分にするだけである〔あり得た⁽¹⁶⁾〕。イギリスに亡命した古代史家ヴィクトル・エーレンベルク（1891－1976）は、この機会に、初めて再びドイツを訪れていたのがあったが、後に彼の〈個人的メモワール〉の中に次のように書き留めていた。即ち、この十年間の底知れぬ深淵に喜んで橋を架けると云う彼の覚悟は、大いに歓迎されたと。そして、次のように続けていた、〈ナチズムの再来は可能なように思えなかったが〉、しかし更に、〈比較的殆んど罪の意識が感ぜられない〉と、エーレンベルクは書き留めていた。⁽¹⁷⁾

乏しい罪の意識は、特定の行為に引き合いに出されるだけではなく、多分、古代学の《粛清》の犠牲者に対する関係にも引き合いに出されるのであり、更に、そのことは、生活の安定と再構築に向けられた個々人の非ナチ化の関心の具合を映しているものであり、その陰に隠れ、排除されたもの、迫害されたものの運命に対する問いと気遣いが、全く問題にならなかった。

非常に精確な資料通であるフランシセック・グラウスは、戦後の膨大ないわゆる〈調査修正文書類〉（Revisionsliteratur）を一瞥し、〈1945年以降、暫し決まりであったような〉、過去を《誤った道》と機械的に決めつけたところで、人々は、〈ナチスの歴史叙述との対決と云う大きな課題を克服することは不可能であろう〉と語っていた。⁽¹⁸⁾ 〈非ナチ化〉の段階での個々の目立つものは、ここまでにしよう。

既に言及されたヨハンネス・イルムシャーのような、かつての東ドイツ（DDR）の古代学の指導的代表者たちは、彼らは、ここで問題にされている様々なテーマ群との対決を、比較的早い段階で、ある意味で彼らの専門学問の〈国家的課題〉として取り組んできた、と云う権利を自分たちに要求していた。イルムシャーは、1950年の「国際古典学連盟」（Fédération internationale des Associations d'études classiques ; FIEC）の最初の大会で、ユネスコ側から、〈ファシズムとナチズムの起源の研究〉が、〈最も注目をしているもの〉と指摘されたことを参照するように指示していた。⁽¹⁹⁾

大学史に対する早い時期の若干の論稿を除けば、東ドイツの国内での〈再生〉は、初めて60年代の始めに始まった。ヨハンネス・イルムシャーの並外れた豊富

な史料と、浩瀚な論文『ファシズム期ドイツにおける古典語授業』(*Altsprachlicher Unterricht im faschistischen Deutschland*)が、その始まりに位置していたが、この論文は、古代学との多様な横の繋がりを見せている。しかし、多くの正当な評価と観察、それに一段と徹底的な機会利用にもかかわらず、＜ブルジョアの歴史叙述の一部＞として西ドイツの古代史学との論争が扱われる宣伝的な綱領的主張は、彼自身が、自らのイデオロギーに拘束されており、大変問題が多いものに留まっていた。

第三帝国における大学の役割に関する論議は、一言うまでもなく、学生運動の批判的問いかけによって刺激され、60年代の半ば、ベルリン大学やミュンヘン大学、それにテュービンゲン大学における周知の一連の講演で始まった。しかしながら、そこでは古代学の諸問題は論じられなかった。

歴史学に関しては、その当時は、ハンス・ロートフェルス (Hans Rothfels, 1899–1976) 或いはハンス・ヘルツフェルト (Hans Herzfeld, 1892–1982) のような著名な近代史家たちの時代であった。シェットラーによる表現によれば、＜保守派亡命者と云う大きな権威をもって＞、ロートフェルスは、＜1933年から1945年の間、ドイツに留まっていた彼の専攻の仲間たちの大部分は、ただ騙されたシンパたちか、或いは隠れた反対者たちによって構成されていた＞と保証していた。ロートフェルスの＜始末に負えない高校教師とか、或いはアウトサイダーたち＞への責任転嫁は、繰り返し受け入れられてきた。⁽²⁰⁾

昨今の論議の中心には、ヴェルナー・コンツェ (Werner Conze, 1910–1986)、カール・ディートリッヒ・エルドマン (Karl Dietrich Erdmann, 1910–1990)、それにテオドル・シーダー (Theodor Schieder, 1908–1984) のような連邦共和国の歴史学界のかつての指導的代表者たちが存在し、その際、周知のように、その批判は、歴史家連盟 (Historiker-Verband) とその欠落している＜責任の告白＞に向けられている。＜自らの弱腰＞を次第に曖昧にしたと、今日非難を受けているカール・ディートリッヒ・エルドマンは、少なくとも、60年代の後半に、既に、1967年のフライブルク歴史家大会フォーラムの前に、ナチス時代の歴史学の役割に関する論議を行おうと企てたのであった。ところが、この歴史家大会に先立って、コブレンツでのドイツの歴史家たちの集まりで (1965/66年?)、カール・クリストゥ (Karl Christ) や、また多くの者の記憶によれば、彼の適切な

提案は拒否されてしまったのである。

ドイツ歴史学の過去との対決の重要な段階を標したのは、次いで、現代史研究所 (Institut für Zeitgeschichte) の依頼で用意された1966年のヴァルター・フランクの〈帝国現代ドイツ史研究所〉に関するヘルムート・ハイバー (Helmut Heiber) の極めて浩瀚な著作であった。《党歴史研究所》 (Das Parteiinstitut für Geschichte) を創設すると云うヴァルター・フランクの野心的な計画は、たとえ実現されなかったにせよ、この帝国現代ドイツ史研究所が、〈完全に周辺の役割〉 (Graus) を果たしたのであり、ハイバーは、疑いなく、この研究所の歴史や、またドイツ諸大学の歴史家たちの行動パターンや葛藤に回りくどい方法で一瞥を加えたのであった。古代史からの主なる出演者たちは、ヘルムート・ベルフェ (Helmut Berve, 1896-1979)、フリッツ・シャッヘルマイヤー (Fritz Schachermeyr, 1895-1987)、ヴィルヘルム・ヴェーバー、そしてユダヤ人問題の研究との関連で、ヨーゼフ・フォークト等であった。

ハイバーの書物は、〈正に、その信じられない位の詳細さの故に・・・、本来的に初めて認められ、公にされ得た研究分野を、直ぐに再び閉じてしまった〉とシェットラーは、一方で述べるが、この点を、私は認めることが出来ない。⁽²²⁾ 大学の歴史家たちの〔*ナチスへの〕貢献を〈見逃し〉得るために、〈何人かのヴァルター・フランクのような、さながらナチス公認の歴史家たち〉に脚光が浴びせられたのであった、と云う印象が抱かれたとしても、それは、ハイバーの説明には殆んど相応しくないであろう。ハイバーの皮肉っぽい言葉選びに比べて、彼の度を越えた説明方法は、—それは、『ハーケンクロイツ下の大学』 (*Universität unter dem Hakenkreuz*) シリーズの彼の巻にも当てはまるのであるが—、確かに様ざまの留保が持ち出される。しかし、私の考えでは、帝国研究所に関する彼の論稿は、実際に研究領域を開いたのであった。その流れには、カーター (M. H. Kater) の『親衛隊の父祖の遺産』 (*Das Ahnenerbe der SS*, 1965/1974) と云う著作、それにラインハルト・ボルムス (Reinhard Bollmus) の〈ローゼンベルク当局〉についてのモノグラフ (1970) が含まれ、—この両著は、ヴェルナー・コンツェ学派のものであるが—、これらで、二つの重要な党組織が分析されたのであった。ヒムラーやローゼンベルクの権力範囲に集中することで、彼らに責任の大部分を〈擦りつけている〉と、これらの作品にもまた婉曲な批判が見

受けられる。それでも、個々の古代学者や歴史家たち、—フランツ・アルトハイム、フランツ・ディルマイヤー (Franz Dirlmeier, 1904–1977)、フランツ・ミルトナー (Franz Miltner, 1901–1959)、ルドルフ・ティル (Rudolf Till, 1911–1979)、それにリヒャルト・ハルダー (Richard Harder, 1896–1957) 等を、私は指しているのであるが、これらの者たちの実例は、彼らに〔*ナチスへの〕貢献を求める盟約が、ここでは、いかに喜んでなされたのか示し得ているのである。

いずれにせよ、指導的ナチス・イデオログたちの影響下にあった研究施設とか組織と取り組むことは、—《ナチズムと歴史学》と云う文脈においてもまた、重要で、客観的に不可欠な研究テーマである。一方、フランクフルト大会の論議は、今日、罪を着せられ、或いは責められているW. コンツェのような歴史家たちは、ポルムスやカーターのそのような著作で守られ、彼らの過去に対して遠回しにしか答えていないと云う考えから起こっている。

正に60年代に、—この点は力を込め強調する必要がある、またそのことは、歴史叙述史の批判者たちも認めていることであるが、—極めて大胆な研究が、中世史家カール・フェルディナント・ヴェルナー (Karl Ferdinand Werner) によって著された。それが、1967年の『ナチスの歴史像とドイツ歴史学』(NS-Geschichtsbild und die deutsche Geschichtswissenschaft) であり、そこには、古代史家たちもまた含まれ、扱われていた。⁽²³⁾ 先駆者的なこの小著の影響に関して、ハイバーとヴェルナーの仕事によって、＜《ナチズムにおける歴史学》の問題は、片付いてしまったと思われた＞と、シェットラーによって抱かれた印象など、この書物は全く与えない。⁽²⁴⁾

このナチスの歴史像の素描的書物に関わる問題として、＜ヒトラー、ローゼンベルク、或いはゲッペルス等の駄文にナチス・イデオロギーを理念史的に還元した＞ことが、＜重大にも、即ち早まって無罪にすると云う結果を伴った＞と云う非難が、ヴェルナーや他の者に対し起きた。狼狽したり、或いは罪を問われた歴史家たちに対し、逸らしたり、或いは免責する策を目論んで⁽²⁵⁾いると。こうした批判を受ける発端〔*となった書物〕が、いかに重要かつ実り豊かなものであるかは、1972年、ヴィラール (P. Villard) が、『古代とヒトラーの世界観』(Antiquité et Weltanschauung hitlerienne) と云う論稿の中で、それを部

分的に利用し、また、今日では⁽²⁶⁾フランク＝ロタール・クロールによる『イデオロギーとしてのユートピア』(*Utopie als Ideologie – Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich*)〔*邦訳は、小野清美他訳『ナチズムの歴史思想、現代政治の理念と実践』柏書房、2006〕と云うモノグラフが印象深く証明している。⁽²⁷⁾

《ナチズムと古代》と云うテーマの論議が始められた状況は、取り分け60年代の個々の端緒的研究に対するこれらの論評と、フランクフルト歴史家大会の周辺状況における昨今の諸議論の文脈からの、それらの批判的解説をもって、概説的、かつ一般に認められる程度に主観的に略述されなければならなかった。以下の解説では、私は、カール・クリストゥが行った様ざまの提起を受けている。

学問史的、並びに影響史的問題に対する関心から、様ざまの出版物が著され、またマールブルク大学のクリストゥの講義に特に注目が集まった。確かに、それは最も初期の研究史跡であるが、1953年6月17日の記念すべき日から60年代の初め、彼は、その講義にマルクス主義的傾向の古代史に関する補説を挿入していた。ナチス期の歴史学の役割に関する彼の議論は、西ドイツの歴史家に対する東ドイツ側からの相応の批判に劣らず、ナチス期の古代学者や古代史のテーマに関する、マールブルク大学政治学周辺からのイデオロギー批判的著述からも刺激を与えられていたのであった。自らの専門分野の歴史との対決では、彼が1970年以来、益々強くその提起を受け入れていたアーノルド・モミリアーノ (Arnaldo Momigliano, 1908–1987) の考え方の中に、全面的に古代史家の本来の課題を認めていた。ドイツの学者たちは、自らの過去を自ら再検討すべきであると云うモミリアーノの勧めもまた、これらの提起に含まれていた。

そこで1971年、クリストゥは、『ドイツにおける古代史の展開について』と云う素描で、広範囲にわたって諸問題を略述したのであったが、そこでは、＜有力な古代史家たちの生涯と仕事、…彼らの個人的運命と彼らの政治的なコミット＞のみならず、また＜その人格形成に対する、歴史的な観点とテーマ選択に対する精神的、宗教的、社会的、並びに政治的影響の意義＞も調べられるべきであった。＜ヴィルヘルム期ドイツ、それにヴァイマル共和制時代の君主制的立場と帝国主義的立場の間の変転関係、および古代の様ざまの現象の評価の変転関係、ないしは1918年から1945年の間におけるドイツのスパルタ像の前提と変貌、並びに一

一般的に、ナチズムと古代の關係を分析することが、また求められていたのである。⁽²⁸⁾

その当時には当たり前ではなかったが、しかし、かなり前に時機を失していた主張には、＜あの時代の学問的な赤字決算をすること＞、即ち＜1933年以降に排斥され、迫害された専門仲間たちを想起すること＞も、また入っていた。クリストゥは、その当時僅かな名前を挙げたに過ぎない。即ち、アルトゥール・ローゼンベルク (Arthur Rosenberg, 1889-1943)、フリッツ・ハイヒェルハイム (Fritz Heichelheim, 1901-1968)、ヴィクトル・エーレンベルク (1891-1976)、フリードリッヒ・ミュンツァー (Friedrich Münzer, 1868-1942)、それにエルンスト・シュタイン (Ernst Stein, 1891-1945)⁽²⁹⁾。

この方向の概要が、既に1968年末にドイツの学術振興会 (Deutschen Forschungsgemeinschaft) に提案されたプロジェクトの核心であったが、それは、権力を握っていた専門代表者たちによって、＜記録的な早さ＞で＜処理＞され、その結論は否定的なものであった。

更に、今日なおドイツ学術振興会の好意的な計らいで調査することの出来た数少ないデータが明々白々に証明していることは、古代史の専門家たち、或いはその代表者たちの側では、その大半は、このプロジェクトを支持する気は全く持ち合わせていなかったことである。プロジェクト案は、その案のカード資料から知られ得るように、1968年11月27日に学術振興会において＜古代史とナチズム＞と云うテーマになり、1969年1月3日には、そこから＜専門委員会＞ (FA) に、恐らく古代史の専門委員会の専門家たちに付託された。僅か5日後 (!)、1969年1月8日には、その提案は、ドイツ学術振興会に戻されたのであった。⁽³⁰⁾ ホルスト・ブラウナート (Horst Braunert, 1922-1976) とカール・フリードリッヒ・シュトレエカー (Karl Friedrich Stroheker, 1914-1988) が専門委員として、この時代にその役目を担っていたが、その際に、両専門委員が、この申請案をそもそも見たのかどうか不明である。彼にそのことが勧められた後、クリストゥは、1969年5月24日付き書筒で、その案を撤回した。1969年5月31日、その提案は、ドイツ学術振興会で＜取り扱い除外＞とされ、それが、その提案のカード資料の最後のメモであった。申請書類自体、1975年に破棄された。

いづれにせよ乏しい文書証拠類に対し、一同じようなことを考えていた—この

件に関する相当数の国内の専門家たちの口頭による話しから、恐らく出発せねばならない。しかしながら、このプロジェクト案に捧げられた尋常ではない〔＊短い〕＜処理時間＞は、それ自体で語っている。所轄の専門委員たちは、彼らの同僚の専門家たちの大方の意識状況や利害状況と、恐らく全く一致していたことは疑いないことである。この事例は、周知の像にぴったり合っているのもあって、しばしば批判されている年長の歴史家世代の典型的な行動パターンに合致している。しかしまた一方で、それは、一フランクフルト歴史家大会で巻き起こった議論よりも30年も前のことであり—全くその機会が与えられなかったが、比較的早期のスタートとイニシアティブを証明している。

このことは、60年代の終わり、或いは70年代の初め、古代史演習の通常の課題の範囲からは全く外れた活動を妨げはしなかった。即ち、クリストゥは、＜ナチス時代＞部門、および＜東ドイツ＞部門と共に、学問史並びに受容史の図書館部門等々を既に1965年に組織していた。彼は、例えば、イギリスやフランスにおける、或いはナチス時代における古代史学の動向に関する資料収集を計画させたが—それには、例えば、*Völkischer Beobachter* から*NS-Monatsheft* に至るナチス刊行物を有効に利用することも入っていた。関連する学位論文の告知、それに国家審査を要する研究の範囲内の色々なテーマへの取り掛りは、クリストゥ自身による同僚専門家についての気がかりな電話による照会に察せられ得る不安動揺を、専門家一般に少なくとも呼び起こしたのであった。噂の発信元から発せられた何から何まで、マールブルクに届いたわけではない。確実に伝えられるのは、ライン川沿いの大きなドイツの大学でのお茶飲み仲間たちからであって、恐らく、それは必ずしも典型的でなくはない光景である。その当時、古代史並びに碑文学委員会のリストに載せられていたマールブルク大学の学位論文の意図は、共産主義の嫌疑がかけられていた。

『ナチズムと古代』と云う学位論文のテーマを論じる際に経験したことは、私は無視したい。但し、これだけは。私の研究は、新情報保護法によって妨げられはしなかったであろうと云うケーニヒスの論評は、誤った印象を伝えている。⁽³¹⁾ 幾らかの公文書館では、私は、部分的にグロテスクな制約の下で研究しなければならなかった。例えば、東ドイツの公文書館でヨハンネス・イルムシャーが手にしている状況を、私もまた自由に利用し得ていたならば。

印刷に付す前段階で、専門家の論争が起きたが、その点は、一般的傾向の中で描かれるべきである。評価判定手続きの第一ラウンドには、ミュンヘン現代史研究所の「現代史研究」シリーズにこの研究を採用することに関して、学問史、並びに現代史の情熱を持った中世研究者の賛成意見と、古代史で学位を取っていた（シェーファー学派の）かなり頑固な保守的な政治学者の反対意見が存在した。判定委員長、政治学者、それに現代史家、および同じく学位を持った古代史家たちは、一年後に解決方法を見つけた、一即ち、そうこうするうちに、別のシリーズの提案が採択されたのであった。

議論の余地があったのは、この学位論文は、古代史的関心によるのか、或いは現代史的関心によるのかと云う問題だった。70年代の半ば、「歴史的背景」シリーズの編集者たちもまた、そこに加わっていた専門家の仲間においても認められ、〈概要ではあるが、・・・ナチズム期の歴史学の分析〉は出版された。それ故、古代史が歴史学の一部門であると強調されている改訂の要望に関して、私はここでお答えすべきであろう。また、研究のアプローチを古代学全体を考慮したものに広げることも求められた。〈大学において、外国語の文献学〔*専攻〕等と比べようのない専攻が、ナチズム思想に身をさらし、その《褐色化した》過去を克服する〉と云うことに、〈この書物の最重要性〉が見られていた。〈当然また、全体として、テーマは、幾らか相対化されるべきであって〉、〈ナチスのオピニオンリーダーに相応しいブロック長たち、彼らは、古代史のあらゆる正教授よりも影響力が強かったのであり、アルトハイムの《戦時動員》等で、その点はほとんど何も変わらない⁽³²⁾〉と現代史家は要約していた。

改訂の要望においては、専門家たちは、資料入手の難しさ、例えば、遺された遺稿、その他に接近する方法を軽く見ていることがかなり明らかであった。他の議論のポイントは、個々の当事者たちは、印刷に付される前に態度を表明する機会が与えられるべきかどうかと云う真に重大な問いに関していた。この提起は、よりによって現代史家たちによって断固として退けられたのであった。ところが、専門家は、このやかましい手続きが、既に用いられたのではないかと訝しみ、更に、一定の状況に対する著者の、部分的に極めて重要な〈理解力〉を明らかにしようとした。〈もしも、年長世代に属しているものたちは、ナチズムに対し不賛成であったと認めなければならないのであれば、どうして著名な学者たちが、多

かれ少なかれ、センセーショナルな形式で、《運動》や彼らの学問と関係のない《世界観》に対して信奉を告白することを尻込みしなかったのであろうか、1933年以降の時代に、年長世代のものたちにしばしば生じたショック体験を、実際に自ら経験して>著者は知っているわけではない、と。

証人調べの断念、一ヒムラーの<父祖の遺産>に関するM. H. カーターの研究の際の、彼の同じ諸経験が疑念のきっかけを与えたのであったが—このことは、しかしまた、<言及されている者>、或いは<該当している者>たち自身が、自ら発言を求めると云う具合には、いずれにせよならなかった。個々の様ざまの事態を公にすることに対する立腹、怒りの爆発についての種々の噂を除けば、聞き知り得ることはこの年長世代の者たちからは何もなかった。アルフレート・ホイスによる意見交換の申し出、或いは誘いが、この関連での唯一の収穫に留まった。

この世代の者たちの広範な沈黙は、フランクフルト歴史家大会での激しい議論のテーマでもあった。即ち、<父親たちの沈黙>、彼の助手たちに対するヴェルナー・コンツェの沈黙、彼自身の息子、ヴォルフガング（Wolfgang）に対するテオドール・シーダーの沈黙、この沈黙こそ、この催しの最も強烈な印象の一つである。このことを証言し、この方向での更なる研究活動を明確に支持していたヴォルフガング・シーダーは、私の考えでは、正しい方向を示している。その場合、その世代の者たちと、彼らそれぞれの社会化によって特徴的なことに集中すべきであろう。⁽³³⁾

1955年以来、ゲッツ・アリーによって繰り返し求められているように、歴史家連盟の<責任の告白>が、何らか役立ち得るのかどうか、私には個人的には疑問である。アメリカ人の歴史家チャールス・マイアー（Charles Maier）の1990年に発した言明、<弟子世代の象徴的なナチス親父（NS-Väter）殺し、その覚悟が、彼らには不十分である>が、フランクフルト歴史家大会でも、再び取り上げられた。⁽³⁴⁾議論が認識させたその覚悟が、若い参加者たちには意外なことであったが、例えば、ユルゲン・コッカやハンス・ウルリッヒ・ヴェーラーにおいては、むしろ足りないのであった。ヴォルフガング・J. とハンスの父親であるヴィルヘルム・モムゼン（Wilhelm Mommsen, 1892–1996）は、既にヘルムート・ハイパーにとって、最も重要な時代証人であり、研究対象であったのであるが、⁽³⁵⁾彼らの間の論争が示していたように、意見の不一致は、家族の間にも交錯してい

たのである。

現代史周辺からの〈父親たち〉と〈息子たち〉の間のこうした関係形態は、古代史においても同じことが認められる。ヨッヘン・ブライケン（Jochen Bleicken）が、彼の70歳の誕生記念コロキウムの〈閉会の辞〉の中で述べた印象深い証言が、その点を証明している。共通の戦争関与によって規定されている大学教授たちと彼自身の年代グループの学生たちの世代との間の戦後における近さについて、ブライケンは報告していた。しかし一方で、ブライケンは、〈大学の暗い過去を徹底的に黙秘すること〉によって、結果的に存在している〈教授たちの世代に対して特別な距離〉を、今日に至るまで感じたし、また感じているのである。⁽³⁶⁾

彼には、〈またついでに言えば、亡命から、或いは地下生活から大学に復帰したユダヤ人学者たちも、この事でこれ以上手を貸そうとはしなくなかったのであり、彼らは、1945年以前に起こったことに関する話題を、それどころかはっきり避けたがっているように思えたのであった〉と、ブライケンは更に語っていた。1958年、書評の中で、〈このすべてを忘却の中に沈ませてしまうことが、今や最善のことであろう・・・〉⁽³⁷⁾と述べていたヴィクトル・エーレンベルクの行動様式もまた、部分的にこの点に一致していた。

ブライケンのこれらの証言が、たとえどんなに印象深いものであっても、その本来の名宛人たちが亡くなって後、70歳になって初めて、どうしてこの問題を公に語ったのであろうかと云う疑問が同時に生じる。

ブライケンによって嘆かれている極めて重要な専門代表者たちの振る舞いと見做されるのは、しばしば指摘されているように、例えばヨーゼフ・フォクトや、少なからず、ヘルムート・ベルフェに明確である。両者は、一フランクフルト大会での発言によれば一上首尾の〈連邦共和国での第二の経歴〉と、彼らに関わったことに対する徹底した沈黙に対する恐らく最も目立った事例であるのだ。

最初に、ベルフェを続ければ、この古代史家は、1945年以後に〈連続性問題の象徴的人物、それにその問題を体現している者〉⁽³⁸⁾になった。カール・クリストゥは、この定義でもって、かつて〈古代学の戦時動員を委任された者〉が、1960年から1967年まで「古代史並びに碑文学委員会」の委員長になっていたことを示唆したのであったが、その件は、一部より年嵩のある弟子たちや同僚たちによって

も批判的に評されたのであった。

弁護論的な言説を無視すれば、古代史の周辺からは、一種の罪責意識についての唯二つの非常に僅かな証言が、私の前にあるに過ぎない。一つの仄めかしは、ヘルムート・ベルフエ生誕100年（1996）のためにデトレフ・ロットツェ（Detlef Lotze）が短く功績を称えたものに認められる。即ち、＜多くの論文を、彼は直ぐに後悔していた。（ヴィクトール・エーレンベルクに論駁した）そうしたものの一つを、彼が私にかつて記したように、彼自身赦すことが出来ない罪に数えていた⁽³⁹⁾＞。この証言は、（1935年の）＜古代オリエントについての学問は、彼らが異なる人種で、我々には本質的に異質であり、それ故に、彼らの奥深い特性において理解し得る民族には当たらない＞〔*と云う一文〕の彼の否定に係関係づけられるが、彼は、1937年にはユダヤ民族に対していっそう厳しく敵対し、その際に、特にヴィクトル・エーレンベルクの著書『東と西』（*Ost und West*, 1935）における＜ユダヤ的な護教傾向＞を攻撃していたのであった⁽⁴⁰⁾。ベルフエにとって今まで恐らく唯一のこの証言が、ハンス・エリッヒ・シュティアー（Hans Erich Stier, 1902-1979）の言説によって補足されたのであるが、それは、彼の論文『ウエストファーレンにとってのローマ侵略戦争の意義。ゲルマン革命の理解のために』（*Die Bedeutung der römischen Angriffskriege für Westfalen. Ein Beitrag zum Verständnis der germanischen Revolution*, 1938）の幾らかの文章に関して、後になって＜恥ずかしさ＞を感じていた⁽⁴¹⁾、と云うものであった（この情報を、私はG. A. Lehmannに負っている）。

これらの僅かな＜偶然の発見物＞は、恐らく狭いお弟子サークルの中で語られたことによって補足されるであろう。しかし、専門家一般の前では、＜沈黙すること＞が支配的な行動様式であったのだ。

古代史の広く沈黙してきた＜父親たち＞の＜息子たち＞と云えば、近代史家たちと似たような象徴的な＜親殺し＞を阻止するための闘いを、多分どちらかと云えば、いっそう高くしようとしている。教師たちの極めて明白な〔*ナチス期の〕関わりに関し知っていることは、強く感じられる恩義によって覆われてしまっていて、当事者たちをして、それ以上、全てを公けに語ることを不可能にさせてしまっているのである。

カール・クリストゥの仕事のプログラムは、こうした沈黙に対抗しており、そ

のことを、例えば、彼のますます度を超えて一段と批判的になってゆくヨーゼフ・フォークトの仕事との対決が示している。もちろんその際、1990年の著書『古代史の新たなプロフィール』(*Neue Profile der Alten Geschichte*) 中のフォークトとベルフェについての部分の比較が示しているように、フォークトに対するいっそうの近さと、ベルフェに対するより深い隔たりは、確かに伝記的な様々な理由から殆ど克服されていない。

本来の意味での息子たち、更に転用された意味での息子たちは、しかし、他の動機からも発言を求めている。ミュンスター大学の学部に正教授として無理やり押し込められ、『古代と我ら』と云う綱領的文書の著者であるミュンスター大学の古典ギリシア語学者ヴァルター・エーベルハルト (Walter Eberhardt, 1897–1981) の息子であるオットー・エーベルハルトの長い書簡がここにある⁽⁴²⁾。彼の息子は、80年代に、非ナチ化資料その他を同封し、詳しく論評して、K. クリストゥ、M. フールマン (M. Fuhrmann)、それに私自身に照会していた。そこでは、彼の父親の致命的な綱領的文書の解釈を変更する手掛かりとなる考え方の試みが企てられていたのであるが、エーベルハルトとシュティアーの生涯の経歴と著作が比較され、要するに、エーベルハルトの変化の証明と戦争中の＜反ナチ斯的解釈＞ (interpretatio antinazistica) に導かれるべきであった。あらゆる弁明的な口調にもかかわらず、オットー・エーベルハルトは、そうしたテキストの＜脱構築＞に、それでもなお、寄与しようとしていたのである。

ミュンスター大学のゼミナールで、エーベルハルトについての議論に続いて、＜人物像論争＞が発生した。エーベルハルトの肖像画は、結局一連の研究所長たちから遠ざけられた。この論争が、アルフレート・クネッペ、ヨーゼフ・ヴィーゼヘーファー、それにハンス-ヨアヒム・ドレクスハーゲ (Hans-Joachim Drexhage) のような若い世代に属している者たちに、1983年、テレージェンシュタットで彼の死を迎えるまでのフリードリッヒ・ミュンツァーの足跡を追うきっかけを、恐らく与えたのであった⁽⁴³⁾。一年前の1982年、クリストゥの『ローマ史とドイツ歴史学』が著されたが、＜ナチズムの犠牲者たち＞が、そこでは、強い調子で評価されている著作であった。こうした時代的な視界の中には、ユルゲン v. ウンゲルン-シュテルンベルク (Jürgen v. Ungern-Sternberg) によって編集された、1935年以来ドイツでは最早流布されることのなかったゲルケ＝ノルデ

ンの『古代学入門』に寄稿したオイゲン・トイブラーの『ローマ人国家』(Der Römische Staat)の新版および復刊(1985)も入っている。⁽⁴⁴⁾80年代には、ベアット・ネフの『ペリクレスからヒトラーまで? アテナイ民主主義とドイツ古代史』(Von Perikles zu Hitler? Die athenische Demokratie und die deutsche Althistorie)が現れたが、⁽⁴⁵⁾それは、非常に有効な方法で、論題の始まりから古代とナチズムの問題圏を解明していた。

たとえ、著しく遅いにせよ、＜専攻の記憶＞を強めているこれらのますます増加してゆく想起的著作と、既に以前になされた思慮を欠いた復刊の行為が、その点はフランクフルト大会の論争者たちによっても嘆かれていたのであるが、鋭い対照を示していた。ここで私は、ベルフェの1937年の＜スパルタ著作＞(Spartabuch)の1966年の復刊を指摘しているに過ぎないのであるが。⁽⁴⁶⁾

90年代と共に、私が、冒頭に大まかな概略を述べた昨今の議論に至った。その発言者たちが認めている＜視点の急進化＞には、一方でまた、多くの歴史家たちの種々の決まり文句に把握される＜告白＞についての論争も含まれている。それは、例えばルドルフ・フィアハウス(Rudolf Vierhaus)が、1968年に定式化した＜他人よりも、30年遅れて学位が授与され、研究や講義をするのは、何ら功績ではない・・・＞のように。P. シェットラーによって批判されたそうした＜自己確認＞の最も重要な結果とは、結局、＜再検討の徹底性を、幾ばくか抑制するように勧めること＞なのであろうか?⁽⁴⁷⁾

ここでは、ただ簡単に輪郭が示され得るに過ぎないが、いっそう徹底的に問題とする覚悟が、1995年のヨーゼフ・フォークトについてのディムート・ケーニッヒス(Diemut Königs)の学位論文であり、極めて容易く我々の文脈に入れられる研究によって強く打ち出された。その前提は、極めて意欲的な収穫の多い資料、並びに足跡の調査であった。＜ローマ人の帝国思想＞のためのフォークトの諸論文に関連して、＜ローマの支配を、非常に理想的に描き、そして第三帝国のそれを同等なものとしているフォークトは、征服地、特に東部におけるナチスの権力行使の結果を明白に知っていたのかどうか＞と云うことを、ケーニッヒスは問題にしている。⁽⁴⁸⁾その問題については、既に言及されたG. アリーとS. ハイムの研究、『ユダヤ人絶滅の先駆者』を、彼女は参照指示しているが、しかし、彼女は、＜フォークトは、人種の粛清や住民たちの政治的な強制処置に関して、事実

としてどの程度認識していたのか>と云う疑問を必ずしも明確には解明出来ていない。フォークトの言説は、一方で、確かな<現実離れ>が証明されるが、しかし、<フォークトは、彼の専門領域の帝国や空間と云うイデオロギー的産物をもって>、<迅速、確実に>日常の政治的諸要件に依っていたと云う結果にしっかり留められている⁽⁴⁹⁾。

古代史の諸概念と日常の政治に強調される種々の関与、それらの影響と有効性に対する問いは、フォークトの特質を描いた<ヒトラーの先駆者、彼の鎧を支えるもの>と云うケーニッヒスのしばしば引用される文言ともまた結びついている⁽⁵⁰⁾。ケーニッヒスが描くヨーゼフ・フォークトの姿は、たとえ連邦共和国でのフォークトの経歴が研究の対象であったとしても、きっと、もっと鋭い輪郭線を持っていたであろう。

<時代に適っている全ての文言が、必ずしも、その作者を確実にナチス支配の従順な擁護者にしてしまうわけではないのである>と、ユルゲン・マリッツは解釈することの難しさを仄めかしていた⁽⁵¹⁾。ついでに云うと、彼の最近の論稿『第三帝国におけるローマ精神；ハンス・オッペルマン』(*Römertum im Dritten Reich: Hans Oppermann*) に、いっそう鋭い問題提起のための覚悟を私は見て取る。

全く別の視点から、即ち、その大部分のものが、ナチスの絶滅収容所で殺されたユダヤ人家族の一員と云う視点から、アーノルド・モミリアーノは、既に1966年にイタリア語に訳されたベルフェの『ギリシア史』の書評の中で、古代史の仕事とナチスのユダヤ人絶滅政策の間を結ぶ線を述べていたが、それは、『ユダヤ人絶滅の先駆者』の議論のスペクトルに組み入れられ得るものである。

<ベルフェのこの著書の翻訳は、私には、取り分け一人の最も重要なナチス歴史家を思い知ると云う観点の下では役立つように思える。全ナチズム期、ナチズム以前、それにナチズム以後の、その全ての段階でのナチス歴史家と、イタリア語で知り合えるとは、実際好都合である。ナチズムは、そのオリジナルな様ざまの資料で研究されねばならない現象であるが、その理由は、少なからぬ才能を持った知識人たちが、ダッハウやアウシュヴィッツの中にその大いなる聖所を保持していた宗教の信奉者に、どのようにしてなったのか、そのことを分らせてくれるからである>⁽⁵²⁾。

フランツ・アルトハイムやリヒャルト・ハルダーのような古代学者たちが、
 [＊権力の] <執行者>に対し危険な近さに近づいているとき、別の事柄を強調
 して、こうした関係が更に注目され得る。一例のみ挙げるとすれば、アルトハイ
 ムのヒムラーの<父祖の遺産>との関係が、彼に対し、カール・ケレーニ
 (Karl Kerényi) の娘をアウシュヴィッツから救い出すのを助ける可能性を与
 えたのであった。アルトハイムと彼の友人、ケレーニとの間の刺激的な手紙の
 遣り取りは、グラティア・ケレーニの生命が脅威に晒されている思いを、極めて
 良く伝えている。⁽⁵³⁾

ローゼンベルク当局と親密に協力し合っていた古典ギリシア語学者、リヒャルト・ハルダーは、1943年2月、思わぬところに、ショル兄弟姉妹の周囲の抵抗グループが委託した<白バラ>のピラについての所見を持って現れた。⁽⁵⁴⁾ これらの全く事情の異なるケースもまた、権力保持者たちとの何らかの動機づけられた結託、それに権力の近くにいることから生じ得るひとつの結果を示しているのである。

この短い論評の終わりに際し、暫定的な結論として、<ナチス期のドイツ歴史学>と云う研究分野は、一いづれにせよ、古代史専攻においても一視点の急進化に責任を負っているフランクフルト大会の論争者たちが認めようとし、或いは気づいていた以上に、疑いなくより強力に開拓されてきたのであったと云うことが、今後も記憶され続けよう。例えば、ここで語られたクリストゥの手始めに関することや、ネフによって纏められた文献目録に記録されていることを、彼らの驚くような、沢山の不愉快な<発見>には誰も異論がないその若い研究者たちも知りたいに違いない、一何故ならば、古代史は、依然として歴史学の一部なのであるから。<歴史学は、・・・フランクフルトでの第42回ドイツ歴史家大会(1998)に至るまで、これまで、このテーマに偶々関わってきたに過ぎない>と云う評価は、少なくとも古代史に関しては殆ど維持され得ないのである。⁽⁵⁵⁾

60年代の終わり、70年代の初めに、チャンスを逃してしまった。即ち、ドイツ学術振興会におけるクリストゥのプロジェクトの申請の却下、きっと緊張を招く<世代間の対話>の前触れとなり得たかもしれないその発議は、他の計画のように適切に支持されることがなかった。

最後に、<視点の急進化>に関しては、モミリアーノがベルフェのギリシア史について述べたことを、私は、再度想起するのであるが、彼は、『ユダヤ人絶滅

の先駆者』の〈議論のテーマ〉を既に1966年に概略的に述べていたのであった。この議論は、古代史においても、これまでよりも一段と広い基礎に立って行われる、そういう時なのである。

註

- (1) ローデンヴァルト遺稿、国立ベルリン図書館、第7部（ローデンヴァルト）、手稿718、シート34を参照。
- (2) W. Schulz/O. G. Oexle(Hrsg.), *Deutsche Historiker im Nationalsozialismus*, Fischer Taschenbuch 14606, Frankfurt a. M. 1999, カバー折り返し、〈巻の構成〉(17f.)を参照。
- (3) P. Schöttler(Hrsg.), *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918-1945*, Frankfurt a. M. 1997, 6.
- (4) Schöttler(Hrsg.), 1997 (註3), 8f..
- (5) *Schweizerische Hochschulzeitung* 19 (1945/46), 71-81.
- (6) M. Weinreich, *Hitler's Professors. The Part of Scholarship in Germany's Crime against the Jewish People*, New York 1946 (rep. 1999).
- (7) Schöttler(Hrsg.), 1997 (註3), 12.
- (8) Weinreich 1946 (註6), 48, 55 (Bognerについて), 102 (Corneliusについて) および102 (Vogtについて)を参照。
- (9) München 1943 (*Schriftenreihe zur weltanschaulichen Schulungsarbeit der NSDAP*, H. 22).
- (10) J. Malitz, Römertum im <Dritten Reich>: Hans Oppermann. P. Kneissl/V. Losemann(Hrsg.), *Imperium Romanum. Studien zu Geschichte und Rezeption. Festschrift für K. Christ*, Stuttgart 1998 538f..
- (11) Chr. Hoffmann, *Judentum im Werk deutscher Althistoriker des 19. Und 20. Jahrhunderts*, Leiden他 1988, 264.
- (12) Th. Herrle, Nationalsozialismus und Altertumswissenschaft, *Aufbau* 3, 2 (1947), 29-32. および、同、Gegenwartsfragen des altsprachlichen Unterrichts, *Die Erziehung* 12 (1937), 474-479, 517-522を参照。
- (13) J. Irmscher, Altsprachlicher Unterricht im faschistischen Deutschland, *Jahrbuch für Erziehungs-und Schulgeschichte* 5/6 (1965), 226.

- (14) F. Altheim, Rom: Reich und Reichskrise, *Forschung und Fortschritte* 19, Nr. 29/30, (1943年10月10日、および20日付)、297-299. 同、Das Römische Reich und die Reichskrise, *Forum* 1, H. 8/9 (1947)、2-5を参照。
- (15) J. Irscher, Die klassische Altertumswissenschaft in der faschistischen wissenschaftspolitik, *Altertumswissenschaften und ideologischer Klassenkampf*. Wissenschaftliche Beiträge d. Martin-Luther-Univ. Halle-Wittenberg 1980, 35, 87を参照。更に、M. Willing, *Althistorische Forschung in der DDR*, Berlin 1991, 31 註17を参照。
- (16) W. Rüegg, Die Altertumswissenschaft in Deutschland, *Neue Züricher Zeitung*, 20. 9. 1949 (Nr. 1900, Bl. 1-2). この集まりで、『モムゼン協会』が設立された。
- (17) V. Ehrenberg, *Personal Memoires*, London 1971 (手稿), 115. Diemut Königs, *Joseph Vogt. Ein Althistoriker in der Weimarer Republik und im Dritten Reiches*, Basler Beiträge zur Geschichtswissenschaft 168, Basel u. Frankfurt a. M. 1995, 59f..
- (18) F. Graus, Geschichtsschreibung und Nationalsozialismus, *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 17 (1969) 94. Schöttler 1997 (註3), 225を参照。
- (19) Irscher, 1965 (註13), 225.
- (20) Schöttler 1997 (註3), 9.
- (21) H. U. Wehler, Nationalsozialismus und Historiker, W. Schulz/O. G. Oexle(Hrsg.) 1999 (註2), 325.
- (22) Schöttler 1997 (註3), 13.
- (23) Stuttgart 1967.
- (24) Schöttler 1997 (註3), 14.
- (25) Schöttler 1997 (註3), 16.
- (26) *Revue d'histoire de la deuxième guerre mondiale* 22, 88 (1972), 1-18.
- (27) Paderborn 1998.
- (28) K. Christ, Zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte in Deutschland, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 22 (1971), 592f..
- (29) Christ, 1971 (註28), 583f..
- (30) この件と以下の記述は、DFG(ドイツ学術振興会)の申請カード資料(2シート)とDFGの Briegleb博士の1999年8月16日付き著者宛の書簡に拠っている。
- (31) Königs, 1995 (註17), 4.

- (32) K. Christ, *Römische Geschichte und deutsche Geschichtswissenschaft*, München 1982に、彼も、これを引き合いに出している、259.
- (33) W. Schulz/O. G. Oexle(Hrsg.), 1999 (註2), 302-305に所収されているW. Schiederのきちんと整理されたKeine Fragen, keine Antworten? を参照。
- (34) Schöttler 1997 (註3), 26を参照。
- (35) H. Heiber, *Walter Frank und sein Reichsinstitut für Geschichte des neuen Deutschlands* Stuttgart 1966, 64ff. を参照。また、広義、狭義における〈父親－息子〉関係に対する極めて啓発的なハンス・モムゼンのインタビューが、Neubeginn und Entwicklung der deutschen Geschichtswissenschaft in den 1950/60er Jahrenであり、以下のインターネットを参照、1999年2月3日付メール。<http://hsozkult.geschichte.hu-berlin.de/beitrag/intervie/hmommsen>。インタビューは、R. Hohls/K. Jarausch (Hrsg.), *Versäumte Fragen. Deutsche Historiker im Schatten des Nationalsozialismus*, Stuttgart 2000に公刊されてもいる。
- (36) J. Bleicken, Schlußwort. Th. Hantos/G. A. Lehmann (Hrsg.), *Althistorisches Kolloquium aus Anlaß des 70. Geburtstages von J. Bleicken*, Stuttgart 1998, 249ff..
- (37) V. Ehrenbergの*Journal of Hellenic Studies* 78 (1958) に所収されたE. Will, *Doriens et Ioniens* (1956) の書評、156.
- (38) K. Christ, *Neue Profile der Alten Geschichte*, Darmstadt 1990, 186f..
- (39) D. Lotze, Zum 100. Geburtstag des Althistorikers Helmut Berve, *Mitteilungen der Akademie Gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt* 11 (1996)、30.
- (40) Christ, 1990 (註38) 170f.から引用。
- (41) *Westfälische Forschungen* 1 (1938), 269-301. 再刊されたものは、H. E. Stier, *Kleine Schriften*, Meisenheim a. Glan 1979, 111-143.
- (42) V. Losemann, Programme deutscher Althistoriker in der Machtergreifungsphase, *Quaderni di storia* 6, n.11 (1980), 70.
- (43) A. Kneppel/J. Wiesehöfer, *Friedrich Münzer. Ein Althistoriker zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus*, Bonn 1983.
- (44) V. Losemann, *Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945*, *Historische Perspektiven* 7, Hamburg 1977, 36 および、E. Täubler, *Ausgewählte Schriften zur Alten Geschichte*, HABES 3, Stuttgart

1987を参照。

(45) Frankfurt a. M., New York 1986.

(46) V. Losemann, *Die Dorier im Deutschland der dreißiger Jahre*. W. M. Calder III/R. Schlesier (Hrsg.), *Zwischen Rationalismus und Romantik. Karl Ottfried Müller und die antike Kultur*, Hildesheim 1998, 340を参照。

(47) Schöttler 1997 (註3), 20, および註59.

(48) Königs, 1995 (註17), 276.

(49) Königs, 1995 (註17), 280.

(50) Königs, 1995 (註17), 287.

(51) Malitz 1998 (註10), 519.

(52) Christ, 1990 (註38), 290からの引用。

(53) V. Losemann, *Die <Krise der Alten Welt> und der Gegenwart*. F. Altheim und K. Kerényi im Dialog. P. Kneissl/V. Losemann (Hrsg.), 1998 (註10), 492-518を参照。

(54) R. Lill (Hrsg.), *Hochverrat? Die Weiße Rose und ihr Umfeld*, Konstanz 1993および, M. Schneider/W. Süß, *Keine Volksgenossen. Studentischer Widerstand in der Weißen Rose*, München 1993を参照。

(55) W. Schulz/O. G. Oexle (Hrsg.), 1999 (註2), カバー折り返し。

出典

Volker Losemann, *Nationalsozialismus und Antike — Bemerkungen zur Forschungsgeschichte*. Beat Näf (Hrsg.), *Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus*. Kolloquium Universität Zürich 14.-17. Oktober 1998, Mandelbachtal-Cambridge 2001, 71-88.

訳者付記

マールブルク大学教授カール・クリストゥの下でフォルカー・ローゼマンの本稿と同じテーマの学位論文が作成されたのは1975年、公刊されたのは1977年のことであった。このコロキウムの発表論稿に手を加えた本稿は、その学位論文作成、公刊にまつわる興味深い事情も伝えているが、もちろん彼の意図はそこにはない。

このコロキウムの一カ月前、1998年9月フランクフルトで催された第42回ドイツ歴史家大会が、

いかにセンセーショナルな大会であったかは、この大会を傍聴し、その興奮に身を置いていたローゼマン自身の本稿の言葉の端々に覗くことが出来る。彼のこの発表は、フランクフルト大会と、更にその大会の一年前に出版された邦訳名『ナチズムと歴史家たち』（本稿、註3）の編者ベーター・シェットラーの論から出発している。このローゼマンの論稿は、フランクフルト大会、およびシェットラーの見解に対する、ある意味で、古代史家から見た異議、ないしは補足と云っても差支えないであろう。

ナチス期の歴史学界と歴史家に関して、特に近代史家たちがその過去に＜沈黙＞を決め込んできた、或いはその沈黙を容認してきたドイツ歴史家ツンフトに対する若手歴史家たちの批判、それは大会にもシェットラーの書物にも共通しており、フランクフルト大会では、この＜沈黙＞こそがキーワードであった。古代史学界においても、同様に沈黙は深かったのであるが、一方で、ローゼマンは、30年近く前（即ち、未だ四十代の古代史家であった）カール・クリストゥによって古代史側から＜既に＞この問題がプロジェクトとして提起されていたこと、しかし、それが＜直ちに＞却下されたことを単に伝えるのではなく、そこに先駆者としてのカール・クリストゥの仕事の意義と、またドイツ歴史学界の光と闇を同時に想起させている。フランクフルト大会より20年近く前に、自ら学位論文『ナチズムと古代』をもってこの問題を問うていたことと合わせ、ここには、古代史側からの幾ばくかの自負も感じられる。

わが国でも、フランクフルト大会、またシェットラーの書物については、何れも木谷勤氏によって詳細な紹介がなされている。前者については、「ドイツ史研究29」（1999）の『ナチズムと歴史家たち—1998年ドイツ歴史家大会の話題をめぐって—』において、後者は、同氏による「訳者解説」によって。そこでも、紹介ないし論は近現代に向けられ、古代史に関してはほとんど触れられていない。大会自体に古代史家の発表はなかったのであり、シェットラーの書物も古代史に触れることはないから、それは当然であるが、ローゼマンの本稿は、大会と同様の方向から見たナチズムと古代に関わる簡潔な報告であり、この欠落を補ってくれているのではないか。

訳者として、文意を捉えるのが難しい個所もあり、熟慮をしたが、なお不満足な個所が見られる。文中、＊印をした個所は、訳者による文脈的な補足である。註には、最小限の形式的修正が加えられている。

なお、ローゼマンの『ナチズムと古代』（本稿、註44）の第1部第1章の拙訳は、本論集第129号（2009年7月）に掲載されている。